

ズーム・アップ・カメラ・アイズ

つわものどもが 夢の跡

Old battlefield

(韓国 雁鴨池)

株式会社 日本構造橋梁研究所
設計第二部設計第四課 課長

上野淳人
UENO Junto



1—復元された雁鴨池

紀元前57年から935年までの約1000年にわたり新羅王朝の都として栄えた慶州は、日本の奈良に似た古墳や寺院が残る、しっとりとした落ち着いた町である。市の中心部から車で10分ほどの所に、王朝の離宮であった「雁鴨池」がある。

7世紀後半、朝鮮半島は高句麗、新羅、百済の三国が割拠する三国時代であった。三国は領土の拡張争いを繰り返すと同時に、朝鮮半島への進出を目論む大国の唐に飲み込まれまいとして、唐に朝貢の意を示す巧みな外交を行っていた。朝鮮半島南端に位置する最も小さい国であった新羅は、遠交近攻のことわざのとおり唐と結び、660年に百済を、668年に高句麗を滅ぼし、朝鮮半島で初めての統一王朝を建国した。三国の統一を記念して、674

年に文武王により造られたのが雁鴨池である。

現在見ることが出来る雁鴨池は、1975年から2年かけた発掘調査により復元されたものである。その後、池の周りにあった3つの建物が復元されているが、未だ礎石だけの所もあり現在でも不明な点が多い。

2—雁鴨池の造景と水理技術

雁鴨池の大きさは、南北165m、東西155m、深さ1.4m、貯水量22,200m³余りである。池の岸は直線・曲線・張出しが組み合わされ、どこからも全体が見通せないように造られていて、狭い面積の庭が無限に見えるように工夫されている。池の中には大・中・小の三島が浮かび、北岸と東岸には12の峰が造られている。当時は島と山に珍しい動物を飼い、美しい花木が植えられていた。これらの島と山は、不老不死の仙人が住む三神山と仙女の住む巫山十二峰(中国の長江、三峡にある全長40kmに及ぶ景勝地)をイメージしたものといわれている。

池の周りには多くの建物が建てられ、王族たちの宴、



■図1—三国時代の朝鮮半島



■写真1—雁鴨池に浮かぶ島と臨海殿



■写真2—雁鴨池に張り出して造られた3つの建物



■写真3—臨海殿から望む雁鴨池



■写真4—曲線を描く岸と造られた峰々

臣下との会議、外国からの貴賓の謁見と接待が行われた。水に張り出して造られた臨海殿からは、人々の船遊び用の船が、その名前の如く「無限に広がる海に浮かぶ船」のように見えたのである。

導き入れられた川の水は上下二段の水槽でろ過された後、石で造られた階段を流れ落ち、池に注ぎ込む。水槽の周りには、あふれた水が流れ出さないように貯水槽も造られている。注ぎ込まれた水は池を一巡した後、排水される。出水口は水位に応じて、仕切板上の越流と下側の孔から排水できる構造になっている。これにより、池は澱んだり濁ることがなく、あたかも川の如く常に美しく澄んだ水が流れていたのである。このような事実は、当時の優れた水理技術を証明するものである。

3—雁鴨池の名前の由来

新羅はその後、大国の唐をも撃退し繁栄を極める。慶州には人と物が集まり、文化や商業が大いに栄えた。仏教も盛んになり多数の名刹が建立された。その一つである世界文化遺産に登録されている仏国寺は、現在見られるものの10倍以上の広さを誇ったという。しかし、



■写真5—上下二段のろ過水槽



■写真6—水位を調整した出水口



■写真7—雁鴨池の復元模型

9世紀に入ると農民の反乱や地方豪族の群雄割拠により国力が衰退し、935年には高麗に滅ぼされてしまう。

新羅の滅亡後、いつしか雁鴨池は、廃屋と荒れ果てた池が残るばかりの寂しい場所になってしまった。このような、かつての栄華の姿を失い、池の周りの葦と浮草の間を鴨と雁が飛び回っているばかりの景色を見た後世の墨画家が、

その様子から雁鴨池と名付けたのがその由来である。この時の墨画家の心境は「つわものどもが夢の跡」と読んだ芭蕉と同じではなかっただろうか。

4—雁鴨池と日本の繋がり

雁鴨池に見られる精巧な造園の工夫は、韓国の代表的な庭苑といわれるソウルの昌徳宮が、自然の地形そのままの広大な庭苑であるのとは対照的であり、日本人の庭に対する感性に非常に近い。百済でも同様の池と建物を造っていたことが知られており、雁鴨池は百済の影響を受けたものと考えられる。そして、その影響が日本にも及んだことを知る時、遠い昔に大陸から海を渡った交流のドラマに想いが至るのである。

事実、飛鳥時代に朝鮮半島から仏教の伝来と共に多数の技術者が来日しており、飛鳥文化の発展に尽くしたといわれている。例えば、先頃、奈良県明日香村で出土した小判形石造物・亀形石造物と、雁鴨池にある上下二段のろ過水槽に類似点を見ることができる。

<参考文献>

1)「雁鴨池発掘調査報告書(本文編、図版編)」大韓民国文化財管理局編 2003

(写真提供:写真1、3、4、上野淳人
写真2、5、7、弥勒綾子
写真6、中村和也)

<取材協力>

慶州文化遺産解説士 崔勇夫